

STEP「子ども・わかもの支援」プロジェクト・講演録

子どもを孤独に、そして孤立させない子育てのために*

—親のかかわり・地域のかかわり—

関西大学・教授
奈良県臨床心理士会・会長
石田陽彦

はじめに



14年間ここ葛城でお仕事をさせていただいています。葛城というところは、子育てに関して暖かい部分をもっておられまして、スクールカウンセラーとして奈良県内のあちこちにも行かせていただいたんですが、結局最後まで残らせていただいたのは葛城市ということになります。この14年間の取組が、国の子育て支援の流れと合致しました。昨年(2008年)には「青少年育成施策大綱」が、さらに、この7月に「子ども・若者育成支援推進法」という法律ができました。これは画期的なものです。今までなら、地域の教育委員会は義務教育まで、高校に行けば県立や私立と、地域との関係が切れてしまっているんです。ところが、内

閣府が7月に作りました「子ども・若者育成支援推進法」は、「小さな子どもから、その子が社会に出るまで、地域がきちっとかかわって子育てをするのだ」という法律です。葛城市は法律ができる前からそういうことにきちっと取り組んでいたいておりますので、おそらく日本でも有数の推進地域になっていると思います。内閣府から、パイロット的に、モデル的に推し進めろという形で話が進められており、来年度からこの葛城市がそのモデル地区になるのではないかと思います。今日はそういうことを含め、実際に子どもを孤独に、そして孤立させないために、どういうふうに子育てをしたらいのかということ、少しお話させていただけたらと思います。

1. 子どもの孤立・孤独が起こす事件

最近、子どもが孤立あるいは孤独ゆえに事件をおこすことが非常に増えてきています。例えば秋葉原事件は、記憶に新しいと思います。実は、子どもの孤立・孤独だけではなくて、高齢者の方も最近

いろいろな事件を起こしています。例えば
老老介護であって、90歳のお母さんを
60歳ぐらいの息子さんが殺してしまう。
結局なにが原因かという孤独・孤立な
んです。年齢に関係なく、孤立・孤独と
いうものが、いろいろな問題を引き起こし
ています。ある程度の年齢になると、ど
うしても孤立・孤独感というのは出てく
るかもしれませんが、自殺もそうなん
です。県の自殺対策連絡協議会の委員も
しているんで、それらの統計を見ますと、
奈良県の自殺というのは高齢の方が多く、
孤独死という形も多いです。そういうこ
とから考えていきますと、小さいときか
ら孤立・孤独の状況は、やっぱり避ける
べきだろうと思います。それは、「家族」
が基本になるんでしょうが、その家族の
苦しさをフォローしていくのは「地域」
でなければならないわけです。「地域」の
役割というのが、今本当に求められてい
ると思います。そのあたりを臨床心理学
の学問上から、今日はお話をさせていただ
きたいと思います。

質問

質問です。「子どもが親にむかって暴力
をふるってくるんです。どうしたらいい
でしょう」と尋ねられたら、皆さんはど
のようにお答えになるのでしょうか。よく
ありそうな話なんですけれども、私は「赤
ん坊の時を思い出してくださいね」と言
います。これはつながらないですよ。実
際どうということなのか、答えは、また
後でお話したいと思います。

2. コミュニケーションの今・昔

今、コミュニケーションが、若い人だ
けではなく大人でも非常に取りにくい状
況があります。大学で講義をしていまし
て、90分の話の後、私は毎回小レポート
を提出させます。170~80人の学生が、
レポートを持ってきます。そうすると、
スーッと通ってポンと置いて行く学生が
いるんです。目も合わしません。「あれ、
僕の講義まずかったかな、よっぽど気に
いらなかったのかなあ」と思います。そ
して、その何も言わずに置いて帰った子
のレポートを見ますと、「先生の話には感
動した」と書いてあるんです。「ちょっと
まてよ。感動してるんやったら、感動し
た表情出してくれよ」と思うんですが、
そうではないんです。自分の気持ちを表
に出せないんです。恥ずかしいのか、表
に出すことに慣れていないのか。ここ
おいでになる皆さん方は、「人とのコミュ
ニケーションというのは大事だ」と思わ
れていると思うんですが、ちょっと自分
の気持ちを出すことすら苦手な子どもが
ものすごく増えています。

昔は「話さないコミュニケーション」
とか「会わないコミュニケーション」と
いうものがあつたように思います。

例えば携帯電話、今はほとんどの人が
持っていると思います。でも、私の若い
時、青年期、いろんな恋心を抱くころで
すが、携帯電話はありませんでした。た
また私が乗っているバス。彼女と（彼
女というのは今の家内にしておきたいん
ですが）駅で待ち合わせをします。バス

で駅に向いましたが、途中でそのバスがガンと車とぶつかってしまいました。当時は携帯電話がなかったですから、どうしようかと思えますよね。今降りて駅まで歩いて行ったほうがいいのか、いや、すぐまた次のバスがくるから待っていたほうがいいのか、いろいろあせりながら考えるのは待っている彼女のことばかりです。待っている彼女のほうも「どうしたんだらう、約束の時間が過ぎているのに」と思ったり、初めは「なんで遅れてくるのよ！」って感じになるかもしれません。しかしそのうちだんだん心配になってきます。心配になってくるけれども、その間はずっと相手のことを考えています。会わないんだけど相手のことを考えています。これは、「会わないコミュニケーション」「話さないコミュニケーション」です。

今はどうでしょうか。ポンと携帯を取り出して「あかん、事故った。ちょっと時間かかるわ、1時間ぐらいかなあ。待っててくれる?」「うん。待ってるわ」カチャ。切った瞬間に男のほうは何をするかというと、携帯でゲームを始めるわけです。女の子は「ああ、大丈夫やってんね。安心した」と、切った瞬間からウィンドウショッピングです。相手が来るまでの間、相手のことを忘れてしまえる。

「おもんぽか慮る」という言葉がありますが、直接会えずにずっと相手のことを考えているという時間が、携帯電話の普及によって圧倒的に減りました。それは間違えようのない事実だと思います。話さない、

会わないでも相手のことを考えるということが、今の時代はどんどん減ってきていると思います。今の子どもたちの様子を見ていると、話しているんですけども右から左で、上の空で、会話がなりたっていないような会話を平気でしています。会っているのに、話しているのに伝わらないそんな状況が垣間見れるときがあります。便利になればなるほど人の気持ちというのは離れていくものです。「合理的」という言葉は、人間の心をつなぐのには一番の大敵なのかもしれません。

3. 精神分析的かかわりの基本的態度について

私は精神分析というのをやっています、臨床心理士です。臨床心理士というのはカウンセラーです。カウンセラーというのは、癒し系とか癒す人とか誤解されるんですけども、癒すだけではなくて、その人が向き合っている問題をどう越えていくか、越えていく努力をしている人にしっかりサポートするというのが本来のカウンセラーの仕事で、時には辛いことも言います。辛くて、苦しんでいる人を助ける、フォローするという仕事なんですけれども、ちょっと誤解されている部分もあります。精神分析というのはどちらかというと「闘うカウンセリング」と言われまして、フロイトという人が考えた方法です。「フロイト以後、患者は苦しくなった」と言われるぐらいなんですけれども、きちっと向き合って問題を越えていこう、越えていく人を支える

という種類のカウンセリングなんです。そういうふうな流れからいいますと、少し今の世の中というのは、言葉だけに流れすぎているかなという思いがありますので、その辺をお話させてもらいます。

＜ありのままを受け入れる（受容）＞

「本当にそうなの？」と思うような言葉っていっぱいあります。よく言われている言葉では「人をありのまま受け入れよう」という言葉があります。ほんとに耳当たりが良くて、「ああ、そうやな」と思ってしまいます。質問させていただきますが、この中で人をありのまま受け入れられる方おられますか。無理ですよ。努力目標なんですか。努力目標にしては出来なさすぎます。要するにきれいな言葉にみんなが納得して流れてしまうのではなくて、「本当に人はつながっていくのかどうか」ということで考え直さなければならないと思います。

少し例をあげてみましょう。中学校 2 年生です。

学校がおもしろくなくて、行きたくない。勉強も嫌で、クラブもだるい。何もかも嫌だ。お昼過ぎまで家で寝ていて、夕方になったら友だちが帰ってくる。じゃあ僕もぶらぶら出て行こうかな。「おかん、千円くれよ。ずっとこもっててしんどいから、ちょっとゲームセンターでも行ってくるわ」お母さんは「なにゆうてんの、ほんま、家でダラダラしてるくせに」って叱ります。子どものほうが「ええやん、一日ぐらい」とかなんとか言って、お母さんも「一日ぐらいなら」と千

円あげる。彼は、ゲームセンターに行って、帰りにコンビニでジュース飲んで、たむろして帰ってきてにこにこしている。

次の日もそうなる。その次の日もそうなる。そうするとお母さんも「あんたい加減にしいや」と、「何日も何日もそんなことできひんわ。1 日ぐらいやったらいいけど」って叱る。そしたら彼は「うるさいわ。くそばばあ」とか言い始めて、お母さんをにらみつけようとする。

お母さんは、これはえらいことだとカウンセラーのところに来る。そうすると、あまりものごとに向き合うことのできないカウンセラーは、「彼は今、一生懸命思春期を生きているんですよ。彼なりに苦しみを持っているんですよ。しばらくありのままを受け入れてあげましょう」なんていうような美辞麗句を言ってしまう。そうするとお母さんは「カウンセラーの人もそう言うから、そうかなあ」と思って、しばらくお金をあげます。彼は毎日毎日それを繰り返します。たしかに行けば楽しくて、帰ってきて機嫌よくなるわけです。「ああ、やっぱりカウンセラーの言うとおりでよかったんや」と思うかもしれませぬ。

本当にそれでいいのでしょうか。それは「ありのままを受け入れている」のではなくて、「なすがままとされている」だけの話なんです。「ありのまま」と「なすがままと」は違うんです。物事が混乱して大変な状況になって、「なすがままとされる」のではなくて、しっかりと向き合うことのほうが大事だと思います。つまり

発達段階でいうと中学2年生ぐらいの子どもというのは、毎日が初体験の連続で、それまで学んだことを次に活かす能力はあまりないんです。中学2年生までは「受容」という安易な言葉で「ありのままを受け入れる」んじゃないくて（当然受け入れるのは大事ですけども）体力・性格、いろんなものを「統合」して、そして「成長へ」という視点がなければ、それは「なすがまま」になってしまうんだということなんです。「ありのまま」ということで子どもたちを重要視しすぎると子どもたちは成長しなくなります。だから、まず相手のことを受け入れながら、いろんなものを統合して、そして「成長へ」という視点がなければ、子どもたちは大人にはなれないんだということです。ここで一歩引きさがってしまっ、なすがままになってしまうと、その子の成長は停滞に変わっていくのです。

<見守る>

「見守る」ということ、これも非常にいい言葉です。なにかあれば、「もう見守ろうか」「見守るしかないかな」なんて言い方をします。しかし考えてみますと、必ず「見守ろう」という言葉を使うときには接頭語がついているんです。「いろいろやってみた。でもうまくこちらの思う通り動いてくれない。しかたがないから見守ろうか。万策尽きたから見守ろうか」になっていないでしょうか。もしも「仕方がないから見守ろうか。万策つきたから見守ろうか」の「見守る」になっていれば、これはもう「見守る」ではなくて

「見捨てる」なんです。関係というものを切ってしまうと子どもは育たなくなります。どんなことがあってもしつこくかかわっていく、大人の粘りと根気でしか子どもは育たないです。それを安易に「仕方がない。だから見守ろうか」こういう美辞麗句にまどわされて子育てをしまくと、子どもはどんどん大人から離れていってしまいます。人と人との関係というのは決して合理的にはいかない。どれだけ根気よくかかわっていくかということが大切なことなんだと思います。

<共感>

次に「共感」という言葉がよく使われるんですが、これも難しいです。何をどこまで共感していいのさっぱりわからないんですね。その共感の行きつく果てが何かというと、深読みであったりしてしまいます。一番大事なものは、本当は、自分が働きかけたときに相手がどう応えてくれるかです。精神分析では「共感」というのは「関与しながらの観察」といいます。自分がこういう言葉を発したときに相手がどういう行動に出てくるか、それだけをシンプルにとらえましょう。それ以上の深読みはしないでおきましょうという考えかたをします。「関与しながらの観察」、つまりかかわっていくということが一番大事で、かかわらないで「見守る」とか「受け入れる」というのはナンセンスだということを言っているわけです。

<こころの教育>

「こころの教育」「個性を伸ばす教育」、

この二つは文科省が推し進めていることで、文科省に楯突くわけではないですが、この二つの言葉が子どもたちをしんどくさせています。まず、「こころの教育」、心って教育できるんでしょうか。あるいは教育していいんでしょうか。前文化庁長官河合隼雄先生（奈良県出身）が、「日本の学校の先生は世界で有数のテクニックをもっている。教えることに関して、それはもうどこの国とも比べられないくらいなんだ。しかし教育者である以上、『育』の部分も欠けてはならない。『教師』はいるけど『育師』は少なくなった」と言われていました。「育む」ということです。心は育むもので、教えるものではないはずなんです。

例えば、小学校4～5年生で「いじめ」がおこります。その時に先生は、「このクラスでいじめは許しません」と、いろんな資料を用いたり、ビデオを用いたりしながら、「いじめは駄目だ」ということを教えます。授業が終わった後、感想文を書かせます。先生の「いじめはだめなんだ」と言ったことを、まるで穴埋めの虫食いで、カッコ埋めを書けば100点満点とれるような感想を、今の子どもたちは書きます。それを見て、先生は、教えたことはわかってくれたんだと思ってしまいます。ベルが鳴って、先生が出て行った直後から、また同じ「いじめ」は繰り返されるんです。それが今の「いじめ」の現状なんです。駄目だということを教えて子どもは学んだが、それ以上のことはなかなか「育めない」状況にあるんで

す。ですから、「こころの教育」ということを考えるならば、「教える」ことも大事だけれど、「育」のほうも少しウエイトを置いたかかわりをしていかなければ、「いじめ」というのはなくならないんだろうなと思います。

<個性を伸ばす教育>

「個性を伸ばす教育」は、20数年前から文科省は言っているんです。文部省の時代からです。

5年ぐらいまえでしょうか、初等中等局長という方にお会いをして「なぜ、個性を伸ばす教育って20年も25年も言っているんですか」と聞くと、その方は「20年25年言っても変わらないから、言い続けているんです」と言われました。「それは基本的なところが間違っているから変わらないんでしょう」というようなお話をしました。「何が間違っているんですか」と聞かれたので「大前提が間違っているんですよ」と答えました。みなさん、個性を伸ばす教育の「個性」の大前提はなんだと思われませんか。「個性とはよいものである」ということを暗に言っているわけです。

「個性を伸ばす教育」などと言っているのは世界中で日本だけなんですよね。なぜかというところ、英語で個性はindividualityですから、「その子特有のもの」という意味なんです。悪い部分も個性、困った部分も個性なわけです。じゃあ、日本の教育の中で、悪い部分を伸ばす教育をしていいのかという問題になります。

極端に言えば、小学5年生で一日煙草を5本吸う。それも個性やから伸ばしてやらなあかんと、一日20本吸えるようにしようなんてことは、絶対にないわけです。つまり、「個性」の理解の大前提が間違っているからおかしくなってくるわけです。この中にも先生方がおられると思いますが、この「個性を伸ばす教育」のために先生方は大変になっています。なぜかと言うと、「個性は良いものである」というからです。先生が生徒を指導するときに叱ります。子どもが家に帰って、こんなことで叱られたと親に言います。親は先生に電話して「それはうちの子の個性ですから、そんなこと言わないでください」って平気で言うわけです。モンスターペアレントというのは、この個性を伸ばす教育という言葉から生まれてきているんだと私は思います。個性は伸ばすものではないんです。まず認めるものなんです。良い部分も悪い部分もあって「あなただよ」と、まず認めてあげないとだめなんです。認められたら子どもは自分でいいところを伸ばそうとします。「君のいいところはここだよ、ここを伸ばしなさい」と伸ばされたら、それはもう個性じゃないです。つまり、自分が人に受け入れられている、認められているという安心感からしか個性は伸びないのです。だから良いところも悪いところも。悪いところも初めは認めてあげないといけません。最初から困ったところばかり指摘をすると関係は、まず切れます。

カウンセラーが学校で嫌われるのは、始めに関係をつくるために困ったところを認めようとするからです。そうすると「甘やかす」といわれます。そうじゃないんです。まず関係を作るために彼全体を認めているんです。みなさんはどうでしょうか。友達とグループで話をしています。自分に悪いところがあるのはわかっています。そこを「あなた、ここが悪いよ、ここが悪いよ」というふうに指摘ばかりしてくる人とお話ができますか？お友だちになれますか？なれませんね。「私はこういう問題があって悩んでいる。どうしよう。こんな悪いところがあるねん」と言った時に「いやあ、それもそうかもしれんけれども、あなたにはこういう良いところもいっぱいあるじゃない」と認めてくれる友だちと付き合っていけば、自分の悪いところも徐々に減っていくわけです。悪いところというのは無理に直すんじゃなくて、自分の良いところが悪い所に働きかけて、周りの人のために悪いところを減らそうということが大事なんです。

そういう子どもたちに育ってもらうためには、「待つ」ということが大切です。子どものいい面も悪い面も認めて、そして良い面にかかわりながら、彼が周りをしっかり見る目を持って少しずつ悪い面を変えていく、それを待つということが、カウンセラーだけではなくて、学校の先生や周りの大人、親御さんの仕事でもあるわけです。子どもを育てるためには、「待つ」という時間が最も大切だという

ことです。「個性を伸ばす教育」とは、まず、個性を認めてあげましょうということなんです。

＜褒めて育てる＞

「褒めて育てる」これもよく言われています。褒めることは一番大事です。ご存知かもしれませんが、関西学院大学はアメリカンフットボールが強いんです。今は他校も強いですが、関学がずっと一世を風靡しているところがありました。そのときの関学のヘッドコーチが武田建先生でした。実は私たちと同じなかまなんです。アメリカで Ph.D. (博士号) をとられて、戻ってこられました。そして『コーチング』という本を出されます。褒めて育てるっていう方法なんです。それで関学は日本一をずっと続けていたんです。それぐらい褒めて育てるということは必要となってきます。でも最近は、「褒めてばかりいるから最近の若い子は甘えて駄目なんだ」と、「叱って育てる」という本も出始めました。だいたい褒めてばかりで子どもを育てられないのは当たり前です。「褒めたり叱ったりして育てるのが子育て」というのは、当たり前のことです。褒めて育てるということが重要視されれば、今度は叱って育てることが重要視される。本当はみなさんが育てる子育て「褒めたり叱ったりして育てる」というのが一番大事なんです。その中で少し褒めてあげることが大事になってきます。

孤独や孤立を防ぐために美辞麗句はいりません。結局「ありのままを受け入れ

る」とか「見守る」とか「こころの教育」とか、こういう美辞麗句で関係を切ってしまう、嫌なことや、面倒くさいことからすぐみんなが逃げてしまうから、関係が深まらなくなっているのです。面倒な人にかかわっていくというのはたいへんですが、それでもやはりかかわっていかないと子どもは育たないんです。

4. 適応指導教室「ふたかみ」

當麻町（当時）では、町立としては日本で初めての適応補充教室を 10 年以上前に作りました。奈良県では 2 番目か 3 番目になると思います。ほとんどは市が県を通して国の補助をもらって運営していたんですが、當麻町はすべて単費でやっていました。それから 12 年たって、今は、幼稚園・保育所・小学校に巡回の発達相談のカウンセラーを派遣しています。そして、中学校には一人ずつのスクールカウンセラーが配置されています。さらに、軽度の発達障害というのは今大きな問題となっていますが、そのためにもっと早くから対応をとということで、1 歳半、3 歳半健診で少し問題があるなどという子に対して療育教室をしています。これは、教育委員会と福祉が現場でくっついているわけです。そして 1 歳児半健診の時からずっと子どもたちをフォローするシステムができています。日本で唯一、その機能を果たしているのが、適応教室の「ふたかみ教室」です。

不登校の子どもが通うところはいろいろあるんですが、普通は、市の教育委員

会は義務教育段階までの子どもしか面倒をみません。不登校をした子は、中学を卒業したら、不登校のままさようならになってしまいます。あるいは、高校に行ったけれどもまた不登校をしてしまうということもあります。卒業した後のフォローがほとんどできていないんです。しかし、葛城市では卒業した子どものフォローもしています。ちゃんと子どもたちを社会に戻すために、しっかりと社会に出るまで面倒をみようとしています。だから、単位制高校や通信制等にかかわらず、全員「ふたかみ教室」にまた戻ってくるんです。そして、社会に出るまでフォローをしていますから、「ふたかみ教室」からの引きこもり率はゼロなんです。これは先ほど言いました「子ども・若者育成推進支援法」の概念に合致しているわけです。「行政の枠を越えてやっているのは、ここだけです」というお墨付きをもらっています。彼らのほとんどは大学にまで進学します。去年も一人卒業して国家資格をとって勤めました。今年も一人大学を卒業する人がいますし、高校を卒業する子どもたちは大学をめざしてがんばっています。

一昨年、奈良県はニート数全国2位だったんです。去年は、16歳～35歳の引きこもり数全国7位です。ワースト7です。ワースト10の中だけでみますと、奈良県の小・中学校不登校は全国1位です。それぐらい奈良県は不登校・引きこもりが多いんです。もしかしたら、みなさんの近くにもおられるかもしれません。

2年前に東京都が引きこもり対策の全都調査をしました。今年、奈良県の引きこもりの全県調査を私が引き受けてやっています。中間報告を10月の終わりぐらいに知事に提出しますが、引きこもりというのは、原因があって結果があるのではないんです。小さいときからの対人関係のまずさというものが、かなり青年期の社会への入りにくさに影響を及ぼしています。

4年かけて、この4月に引きこもりの保護者の会をつくり、月1回活動をしています。しっかり社会に戻れるように地域がかかわっていかないとどんどん増えていきます。今、日本で引きこもりの人は、16歳から35歳で64万人です。不登校の数は、小学生・中学生併せて12万人です。76万人の人が社会に出れていないわけです。これが100万人になってその人たちが仕事もせずに税金を納めずに、健康保険料も納めなかったらどうなるのでしょうか。「ええ歳して甘えてんのとちゃうぞ。しっかりせい」と100回言ってしゃきっとするならば言いましょう。でもそうじゃないんです。いろんな問題をかかえた子どもたちがいっぱいいるんです。その子どもたちが、少しでも社会に近づく様な努力をしていかなければなりません。それは小さい時からきちっとかかわって行って、社会というものと関係を切らないようにしなければいけないんだと思います。

5. 精神分析が重要視する5歳までの発達

関係を切らないために小さい時はどうすればいいでしょうか。実は、フロイトという人は5歳までの発達を人間は何度も繰り返すんだと言っています。

＜絶対的安心感・基本的信頼感 —0歳～1.6歳—＞

0歳から1歳半までは絶対的安心感・基本的信頼感の段階です。「どんなことがあっても私は、親には見捨てられないんだ」という安心感をつける段階のことで、この絶対的安心感・基本的信頼感というのは、赤ちゃんを裸の王様にしてあげることなんです。例えば、お母さんがおっぱいをあげます。おっぱいをあげた後、起こしてポンポンと背中をたたきます。そうしたらグプっとします。お母さんは「きたないなあ」とは言わずに「よくグップしたね」と言って口の周りを拭いてあげます。あるいは、ふとんの中でウンチをしました。おしめの中をパッと見て、「あ、ええウンチャ」って、ウンチまで褒めます。もしも私が食事中にグップしたら、「ようグップした」とは言われません。「もうきたないなあ。向こうに行ってよ」と子どもからはぼろくそです。つまり、0歳から1歳半までは、どんなことをしても受け入れてもらえる段階なんです。

そして、第1反抗期が来ます。どんなことをしても「いいよ。いいよ」と言われていたのに、手も足も体も動くようになって何かしようとしたら、「あれしちや

だめ。これしちやだめ」と言われます。

「今までええっていったやん。なんであかんの」と第1反抗期が起こるわけです。つまり、この反抗期がおこるのは健康な証拠で、しっかり愛されているからこそ第1反抗期が起こるわけです。だから、2～3歳でもうすでに親の顔をうかがいながら行動しているような子どもは、後が心配です。しっかりと愛して、しっかりとぶつかるということがこの段階でも必要となってきたんです。

6. 関係性(コミュニケーション)の基盤＜生得的行動種(反射)＞

コミュニケーションというものがそういう関係のベースになります。人間というのは生理的早産といわれていまして、他の動物は自分でお母さんのおっぱいを飲みに行くわけですがけれども、人間の赤ちゃんは、生まれたては何もできません。ですから、大人が子どもに「してやる」ということを考えがちです。しかし、実はコミュニケーションの基盤になるものは本当はそうではなくて、先に子どもが大人に働きかけているんです。それにどううまく応じてやるかによって、コミュニケーションの基盤が決まります。

それは、生得的行動種と言って持って生まれた赤ちゃんの行動で、本能・反射とかいうものです。例えば、赤ちゃんが寝ているときに指にそっと手を当てると、ぎゅっと握ります。これを把握反射といいます。自分では動けないから、クッと体を丸めてつかまろうとします。これが

ないとだらんとしてしまって、お母さんが赤ちゃんをすごく重く感じてしまうわけです。赤ちゃんは、来てくれたらすぐにつかまる準備ができています。あるいは、赤ちゃんの口の周りを触るとびゅっと唇をとがらします。これは、吸引反射といって、赤ちゃんは触れるとおっぱいを飲もうとするために口をとがらすんです。この吸引反射という行動がなければ赤ちゃんはおっぱいを吸えないんです。最近の赤ちゃんはこういう生まれながらもっている生得的行動種が弱くなっていると言われていて、生まれたときからちょっと関係が弱いなんて言われています。

<泣き>

「泣き」「微笑み」もそうです。赤ちゃんの「泣き」というのは、音声スペクトラグラムでとりますと、お母さんのお腹からでた直後はウワーと大きな声で泣きますが、それから3~4週間はあまり火のついたような泣きはしないんです。あーん、あーんと泣きます。このあーというのは呼氣的泣きで、息を吐くときの泣きです。んーというのは息を吸うときの泣き、吸氣的泣きと言います。その呼氣的泣きと、吸氣的泣きのあーとんーの間には0.2秒の隙間があいているんです。音声スペクトラグラムでそれがわかるんです。最初、赤ちゃんはお母さんをお母さんのために泣こうとして、意味のある泣きをしているのではないんです。ただ、自分の体になにか不都合があったとき、泣き声という音声で信号として出しているだ

けです。4週間ぐらいまではこの意味のない泣きなんです。でもその間、赤ちゃんが泣くとお母さんはすぐにとんできます。「あれ、どうしたんやろ。さっきおっぱいをあげたところやのに。なぜ泣いているんやろ。さっきおしめを替えたばかりやのに、なんで泣いているんやろ」そして抱きあげますよね。その行為を子どもが学習します。つまり、泣けばお母さんはきてくれるんだという行為を、生後4週間ぐらいのうちに学習していくわけです。これを条件付けといいます。そして4週間ぐらいたつと、穏やかな泣きから火のついたような泣きに変わっていきます。つまり、親を呼ぶために「ギャー」と泣き始めるのです。4週間の間に子どもはこんなことを学習しているわけです。すごいですね、人間というのは。

<微笑み>

そしてもう一つは、「微笑み」。「赤ちゃんの微笑みは天使の微笑み」について、ちょっと味気ないことを言います。生まれたての赤ちゃんがにこっと笑ってくれます。夜中に天井を見てにこっと笑うんです。なにもないのににこっと笑っている。そうするとお母さんは、「きっといい夢みているんやわ」と言いますが、生まれたての赤ちゃんは夢をみません。実は、赤ちゃんの生得的行動種の中に「微笑み」というのが組み込まれていて、「2時間半ごとにほほを引きつらせなさい」という遺伝子が入っているんです。ですから、お母さんが赤ちゃんを抱いていてにこっと笑ってくれたので、「お父さん、お父さ

ん、笑ったよ」と呼んで、お父さんがあわてて飛んできてその時はもう笑っていないんです。そうしたらお母さんは「やっぱり私でないとかかんねんわ」って自慢をされますが、お父さんも2時間半ごとに来たら微笑みに出会えるわけです。そして、その2時間半ごとの筋肉の引きつりによって、お母さんが満面の笑みをもって抱きかかえてくれるということが分かれば、今度はだんだん無駄な微笑みは無くなっていくわけです。そして、その次に人見知りが始まります。顔を分別して、本当に必要な人だけに微笑むということになります。子どもたちは生まれるながらにしてそんなことを学習しているわけです。そういうふうな関係が日々繰り返されることによって、しっかりとした絆、関係が生まれてきます。つまり、子どもが持っている行動にどううまく応じてやるかが一番大事なのです。

これは、大きくなって一緒にだと思えます。小学校4～5年生になって、勉強させたいとお母さんが参考資料や問題集などをいっぱい買ってきても、子どもが「したい」と思ってなければ、ほったらかしています。無駄になってしまいます。でも、子どもが何かやろうかなと思った時に、子どもが要求した時に与えてやると、グッとそれをモノにしていくわけです。だから、合理的な子育てと言ってはおかしいですが、子どもの欲求として、何かをして欲しいなと思っている時に必要なものを出してあげるのが一番効果的なんです。それを先に用意してしまうと、

子どもに「物だけが増えていやになっちゃう」なんてことがおこってしまうわけです。

7. 行きつ戻りつの成長過程

<共生関係>

1歳半から4歳半くらいまでの間につけておかなければならないのは、「野心」とか「自信」「自己愛」といわれるものです。「僕はなんでもできるんだ。すごいんだぞ」というものをつけておくことが必要です。だから、5歳児ぐらいのことを「スーパーマンエイジ」と呼びます。まず、「どんなことがあっても自分は見捨てられない」という安心感から、「僕は何でもできるんだ」という自己愛です。5歳児さんくらいでしたら、よく「〇〇戦隊5レンジャー」だとかいって走り回っています。私も5歳位の時は首に風呂敷を巻いて、空を飛んでいたんです。でも、最近の幼稚園の子どもってみんな賢くなりすぎています。2年ぐらい前、ある幼稚園で風呂敷を巻いて空を飛ぶ格好をして「おっちゃんといっしょに空を飛ばうぜ」ってやったんです。そしたら、5歳児はなんと言ったと思いますか。ポケットに手をつっこんで「フン。意味ないやん」なんだか子どもが「子ども」でなくなっているんです。

子どもは「子ども」としての仕事、職業は「子ども」なんです。子どもらしいことが一番の仕事なんだけれども、早く大人になれば大人が望んでいるんじゃないか。それこそ、「いい子の素と栄養とを

粉ミルクに入れて電子レンジでチンとやったらいい子になりました」みたいな。そんなことは子育てには絶対ないですね。「いい子」というのが一つの問題、キーワードになっています。だれにとっての「いい子」なのかということです。子どもは自分にとって都合よく生きるのが「いい子」になる条件なんです。大人の顔をうかがって、大人にとっていい子になってしまえば、子どもは子どもでなくなってしまうんです。

たとえば3~4歳くらいになりますとお母さんは寝る前に絵本を読んであげます。動物の絵本を読んであげたとします。「うさぎさんピョンピョンかわいいね。ライオンさんガオーこわいね。キリンさん首ニョキ長いね。ぞうさんノシノシ大きいね」なんてやると、子どもはそれを覚えていて、お母さんの前で「うさぎさんピョンピョン。ぞうさんノシノシ。きりんさん首ニョキ」ってやりますよね。子どもが「きりんさん首ニョキ」つとやって、お母さんは「あなたの首はそんなに長くないのよ」とは言わないですね。「うわあ。長い、長い長い」と言ってあげます。「うさぎさんピョンピョン」とやると、「ピョンピョンかわいいね」、「ぞうさんノシノシ大きいね」とすると、「大きいね」と言ってあげます。褒めます。つまり、これぐらいの時はしっかり褒めてあげないと「すごいんだ、すごいんだ」という気持ちはおこらないんです。先に正しいことを教えてしまうと、正しい知識を詰め込もうとすればするほど、子ど

もは辛くなってくるんです。教えて何かを学ばせることは実は、逆に子どもたちはしんどくなってくるものなんです。5歳くらいまでは「知識」の詰め込みをするのではなくて、「知恵」を伸ばすことが非常に大事です。

子どもはこうして、小さいときはお母さんと共生関係、「私=お母さん」なんだという考えでいます。

<分離固体化の過程>

4歳になった4月、幼稚園に通い始めます。まず、慣らし保育があります。「4歳児さん」とひとくくりに言っても、4月生まれと3月生まれではほぼ1歳違いますから、ついていけないのは当たり前なんです。さっと幼稚園に入っている子、お母さんにしがみついて入っていけない子、両方とも可愛いです。

ある私立の幼稚園の先生がこんなお話をされました。「最近の子どもってね、慣らし保育にさっと入ってくるんですよ。泣かない。横で見えていたら、お母さんがこっちを振り向いてくれないって泣いて帰れないでいるんです」お母さんのほうが子どもから離れられなくなってるケースがあるそうです。ここで一番の問題は何かというと「私=お母さん」だから、小さい子どもは、「自分が考えていることは、お母さんがしてくれて当たり前だ」と思っています。それに親たちは一生懸命応えてあげる。3~4歳まで応えてあげるから、子どもは「自分はすべて認められる」と思うわけです。

そして分離固体化といって、少しずつ

「私とお母さんは違うもんや」、そして中学2年生くらいで「私とお母さんは完全に違うものだ」と思うようになります。だから、中学2年生くらいになると、女の子はお母さんのことを「あの人」と言ったりするんです。男の子は言いません。「いじめ」でもなんでもそうですけれども、女の子のほうが先に起こります。小学校4年生半ばから、「お手手つないで一緒にトイレに行かなかつたら“はみご”にするよ」とか。そういうふうになんか女の子がややこしいことをやっても、男の子はケラケラケラと屈託なく遊んでいるんです。なぜか。男の子の脳の成長は、女の子に比べて圧倒的に遅いという事実が、最近わかりました。だから心の成長も遅いです。この会場にいる女性のみなさんも、小学校5年生くらいまでは「なんて男の子は子どもやろう」とか、中学2年生くらいまでなら「男の子ってなんてデリカシーがないの。ガキやなあ」などと思っておられたと思います。高校生くらいになってようやく追いつくんです。

男の子が一人目に生まれたお母さんっていうのは、だいたいこのように言われます。「男の子って何考えているかわからんわ。あほちゃうかって思う時いっぱいあるんですよ」と。それくらい脳の成長が本当に遅いんです。成長が遅いから、男の子の脳は傷つきやすいんです。だから発達障害は、男の子に女の子の4倍から5倍生まれるんです。だから、男の子はやいやいや言って育てるとだめなんです。じゃあ、その子の生き方の通りほっとい

たらいいかという、そうするとぼうっとした子になっちゃうんです。その辺が子育ての難しいところです。

＜自己同一性＞

まずは、しっかりと母子共生ができていくことが一番大事です。幼稚園も、4月生まれの子どものほうが3月生まれの子どもと比べてさっと入っていけるのは、一年長くお母さんと関係を作ってきたからです。「網膜にお母さんが映っていないと心配だ」ではなくって、お母さんとしてしっかり関係を作った子は、自分の胸ポケットにお母さんのイメージを入れているわけです。つまり、目の前にお母さんがいなくても、お母さんが自分の心の胸ポケットにいるからみんなの中に入っていけるわけです。で、終わったら、だーっと走って行ってお母さんの足元にくらいつきます。要するに、胸ポケットにいるお母さんと、現物のお母さんをきちっと結びつけるわけです。そして「ああ、お母さんはやっぱり僕を見捨てなかったんだ」ということを再確認していきます。それが、慣らし保育の段階なんです。それから徐々に離れていって、中学生くらいになってくると、「私とお母さんは別のもの」となり、それが「私と友達は別のもの」というふうを考える土台となっていくのかもしれない。だから、まだ小学校5年生6年生だと、「親なんか嫌いや、大人なんか嫌いや。私のことわかってくれへん」と言います。「じゃあ、君は親のことをわかっているのか」と聞くと、「いや、私は子どもやから、わからんで

ええねん」と言うんです。Oneway なんです。それはなぜかという、まだ「親がわかってくれないと、嘘だ」と思っているからです。わかって欲しいんです。それが、別の人間だと分かればお互いにちゃんと話をしてわかりあいましようという形になっていきます。でも、今の子どもたちはちょっとこの時間が長いです。「わかってくれない」と、「わかってもらう」ことに依存している子どもたちが非常に増えてきています。自分から相手のことをわかるという努力をしないで、「自分のことはわかってもらいたい」という思いが強いのは、小さいときに十分にわかってもらえているという安心感が少なかったからかもしれません。かわりが減ってきているのかもしれませんが。

＜子育ては、組んず解れつ＞

3 人兄弟で少し気をつけていただきたいのは、3 人兄弟の真ん中の子です。3 人兄弟の真ん中の子は、他の兄弟とちょっと違うところがありますね。長男・長女は、生まれた時に 100%の愛情を独り占めします。だから、この絶対的安心感はずつきやすいんです。二人目になると愛情は 50%・50%になります。そして、下の子が生まれると 33%・33%・33%です。足し算をしていくと長女は、183%（100%+50%+33%=183%）の愛情をもらっている。真ん中の子は 83%で、一番下の子は 33%になります。「えっ、一番下の子は、愛情、一番少ないの？」という話になりますが、そうじゃないです。一番下の子というのは無責任にかわ

いいからプラス 200%ぐらいあるんです。甘やかされています。そうすると、真ん中の子が愛情不足を感じやすいんです。だから、真ん中の子は小学校 5 年生まで非常にいい子が多いんです。長男、長女は愛情をいっぱい受けてるので、下の子から見たら「あんなん言うたらお父さん、お母さん怒るの当たり前やん」ということも平気でチャレンジしていきます。それを見て下の子は「ああ、またやった」と思っています。また、自分より下の子を見て「あんなんしたらお父さん、お母さんに迷惑かけて怒られるからやめておこう」と思って自分からいい子になるんです。全てが全てそうじゃありませんが、割合真ん中の子に多いんです。だから、真ん中の子は五年生ぐらいまでは育てやすいと思います。でも、お腹の中では「自分は愛情は足りない」「二人とももらっているのに自分は足りない」と思っています。だから「愛されるためには自分がいい子にならなきゃいけない」と思って、自分からいい子になるのです。

それが、中学二年生になったらとんでもなく手のかかる子になっていくわけです。何故かという、親子関係というのは、組んず解れつぶつかり合うことで、子どもが何をするか、親はどういうふうに言ってくるかを理解し合っていくわけです。それが、自分からいい子になっている努力をしている子というのは、親とぶつかる機会が減ってしまいます。そうすると、親がどういうことで怒るかも分からないし、親も子どもがどういうこと

するか、よく分からなくなるのです。そして、中学二年生という自立の時期を迎えると、本当に「何も喋らなくて、何を考えているか分かれへん」なんていう子になってしまいます。つまり、子育てと言うのは、「いい子」でいさせるよりも、関係を切らずに、諦めずに、「組んず解れつ」をする方法しかないんです。子どもというのは、「大人にとって都合のいい子」ではなくて「自分にとって都合よく」過ぎさないとダメだということなんです。

8. 人は一人で生まれて一人で死ぬのか

人は一人で生まれて一人で死ぬのでしょうか。本当は、「二人居て、初めて一人になれる」のです。つまり、幼稚園や小学校のときには、お母さんというイメージを自分の胸ポケットの中に入れてる。これは、「子どもは一人なんだけれども、中にお母さんがいる」ということです。二人居て初めて一人になれる、そして「私は、一人で幼稚園に行けます」「人の中に入っていけます」と、一人になる強さを持つわけです。この段階をしっかり踏ませてあげないと、社会に出ると言う訓練ができないわけです。

9. 分析の発達論と幻滅論（北山修）について

精神分析医で今、九州大学の教授をされている北山修先生をご存じでしょうか。『帰ってきたヨッパライ』『♪おらは、死んじまっただ』とか『戦争を知らない子どもたち』『♪戦争を知らずに僕らは生ま

れた』という音楽をご存じだと思います。フォーククルセダーズというグループサウンズが歌っていました。実は、このグループサウンズのメンバーの一人が北山修先生なんです。京都府立医大というところにおられまして、私もそこでずっと研修をしていましたので、その時に一緒にになってお話しをさせてもらいました。先日もお会いした時に、『分析の発達論と幻滅論』について聞きました。「錯覚」についてです。つまり、子どもは絶対的安心感、基本的信頼感のときは「錯覚」をしているんです。「自分は、裸の王様だ」と、「錯覚」なんだと。それが、2、3歳になると「あれしちゃだめ、これしちゃだめ」と言われるから、「脱錯覚」です。夢から覚めてくるのです。そして、5歳くらいになると「ああ、何か思う通りいけへんわ」「親は、全部受け入れていると思ったが、思う通りいけへん」と、友だちと遊ぶことを覚えます。親に対しての「錯覚」から、少しずつ「脱錯覚」をして「幻滅」を感じていく。これが「自立」なんです。この流れの中でしっかりと関係を作っていけないといけないうのです。

<野球少年の場合>

実は、この流れというのは5歳までじゃなく他にも当てはまります。例えば、野球少年の場合です。小学校で一生懸命野球をした子が、中学校へ行ったらまざどこをめざすかという、奈良県の場合はk高校です。「k高校へ行って、甲子園に出るんや」というのが「錯覚」です。1年生、「野球も勉強も頑張ってk高校へ

行くぞ」と言って一生懸命頑張っています。2年生になりました。「野球も僕より上手いやつおるわ。勉強は、このままやったらちょっとk高校むりやな」と自信が揺らぎます。でも、ちょっと夢から覚めながらも頑張ります。これが「脱錯覚」です。3年生の夏になりました。「ああ、とうとうレギュラー取られへんかった。このままでは、k高校は無理や」という「幻滅」に至ります。その次が「自立」ですね。「高校へ行っても甲子園出られへんかもしれんけど頑張って野球しよう。勉強も少ししよう」そういう「自立」が認められれば、その子はスムーズに行くのですが、ここで横やりが入るわけです。「あんた、ええかげんにしいや。三年間、野球したおして。大学行ってもらわな困るねんから、高校野球なんか考えんと、勉強する私学へ行きなさい」なんて言われて無理やり私学にポンと放り込まれると、5月、6月に学校をやめたり、不登校になったなんてことが起こるわけです。

<結婚の場合>

もう少し後もそうです。結婚の場合「僕は、あの人のこと愛している。あの人もきっと僕のことを愛してくれているに違いない」という「錯覚」。もしかしたら「誤解」かもしれません。2、3年するとだんだん本当の相手が見えてきて、「あれ、この人結婚する時と変わってきた」お互い様なんですけど、5年ぐらいしたら、「ああ、何でこんな人と結婚してんやろう」という気になります。その後生まれるのが「自立」なんです。

10. 「5歳×3セット」の意味

「自立」にもいろんな形があります。ウィニコットという人は、フロイトの5歳までの発達段階を利用して、「5歳×3セット」で大人の入り口に立つと言いました。つまり5×3=15歳、義務教育段階が終わる頃なんです。日本の義務教育というのは、そういう意味では非常に上手くできています。

<5歳~10歳>

5歳から10歳の頃は「潜伏期」と言われて、最近ちょっといろんな問題が起こり始めてはいますが、どちらかというとなんとか越えていける問題です。

ですから10歳から15歳が問題になります。心の成長のターニングポイントは、小学校5年生なんです。いじめ、不登校、非行、虞犯の始まりは、ほとんどが小学5年生から中学2年生の間です。小学校4年生までを「前思春期」といいます。思春期に入る前です。思春期というのは「おとな半分、子ども半分」ということですが、その思春期に入る前だから前思春期。つまり、子どもが本当に「子ども」でいるのは9歳までなんです。10歳からは、少しずつ「おとな」になり始めているんですから、そこで急かしてはだめなんです。しっかりと9歳まで「子ども」でいさせてあげると、10歳以後、子どもはすくすくと育ちます。しかし、9歳までにおとなに出来るようなことばかり、おとなにとって都合のいい子育てをしてしまうと、子どもは10歳以後しんどくなるんです。9歳までの子育てというの

は、本当に一番大事なんです。

「潜伏期」というのは、子どもを熟成させる時なんです。ウィスキーでも熟成させるような期間です。0歳から5歳までしっかりと付けられた愛情関係というものを、5歳から10歳で熟成させる期間ですから、「潜伏期」あるいは「安定期」と呼ぶわけです。

<10歳前後>

そして、10歳から15歳に入ります。この間に子どもたちはどんどん変わっていきます。10歳前後のことを「自我の目覚めの時期」と言います。大体、第2反抗期というのは中学2年生ぐらいのときで、皆さん方よくご存じですね。それで、この10歳前後のことを「中間反抗期」と言います。これは、あんまりご存じないんですが、第1反抗期と第2反抗期との間にあるから中間反抗期と言って、自我が目覚める。自己意識が目覚める。だから、いろんな問題が起こってくるわけです。

今までは、お母さんの眼鏡を通して社会を見てきました。そこから、友達などのいろんな周りの目を通して自分から社会を見始めます。そして、大人になろうとする段階だからいろんな問題が起こってくるわけです。自我が目覚めるためにはじっと部屋にこもって「ぼくはこんな人間や」と思っていると、なかなかできません。こもって自分を作ろうとしている形が不登校の子なんだと言ってもいいと思います。多くの子は、どういうふうに自我が目覚めるかという、他の子

と自分と比較して目覚める。「あの子は、あんなんしているけど、私はそんなことはしない」「私はこうするんだ」という気持ちを持ち始めるのが小学校4～5年生からです。女の子の場合は、ちょっと早いです。そして、この「自我の目覚め」というものが自分と他者との比較から始まるので、ちょっと自分に自信のない子たちが「いじめ」を始めたりするのです。みんなが自分に目覚めてきて、何か違う感じがします。外されるんじゃないかと「違う」ことが不安で「いじめ」を始めます。仲間が欲しいと言って、仲間に入れて、誰かターゲットを作ってその子だけを外そうとし始めるのもちょうどこの時期です。だから、逆に言えばこの時期の自我の目覚めというのは、他者との比較によりますから「いじめ」を起こす必然性のあるものです。それを「いじめ」にもっていかないためにどういう取組が必要かといいますと、「ちがいを認めながら相手を認めることです。「ちがいを分かりながら、自分と他人との「ちがいを認める」ということが一番大事なことです。「みんな一緒」が一番ダメなんです。「みんな一緒」を無理に思うから、そこでしんどくなった子が「いじめ」を始める。みんなちがうんだから、「ちがいを認める」ということをしっかりやっつけていかなければ、よけいに「いじめ」がひどくなるんです。

<15歳前後>

そして自我の目覚めの完了が中学2年生ぐらいです。だから日本中というか世

界中の中学2年生が反抗期になって当たり前なんです。13歳~14歳です。だから、「この中学校はいい子を作るんだ。13、14歳が反抗しやがって」と、上から押さえていたらもっと荒れちゃうんです。

正面からぶつかることも大事ですが、ちょっと一步引いて受け入れて、認めてあげることによって彼らが納得すればいいのです。でもそれを、「反抗しやがって」と上から押さえれば押さえるほど、どんどんひどくなって爆発して、卒業式に警察を呼ばないといけない事件になっていくわけです。子どもが持っている発達にうまく応じてやるのが、おとなの一番大事な仕事になってきます。ただ、何でもいいのかというところという訳じゃないです。枠というものは必要になってきます。好き放題ではだめです。相手の子どもが持っている問題行動によっては、その枠を縮めたり広げたりという柔軟性が求められます。当然、おとなの方が子どもより柔軟性があるべきです。

＜この頃の子育て①＞

子どもさんを持っておられると経験されていることと思いますが、小学校の時は、たいして勉強も厳しくないし、クラブもないですからあっけらかんと学校から帰ってきます。でも中学校になると勉強もクラブも忙しくなり、へとへとになって帰ってきます。埃のついた服、砂のついた靴下、汗どろどろのまま「あー疲れた」と居間にどーんと座りこみます。お母さんはご飯の用意をされて「あんた、早よ手洗いなさい。おやつ用意して

あげてるから。も一、そんなくっさい服着やんといてよ。早よ手洗ろてよ。ほらほらほら、砂落ちるやん」「ええやん。しんどいねん、ゆっくりさせてよ」「何言うてんの、早よさっさとしなさい」

すると子どもは「うるさいくそばばあ」とか言うわけです。お母さんは、「親に向かってくそばばあって、何ていうこと言うの」子どもも負けてません「くそばばあとちごたら、鬼瓦じゃ」お母さん「ええ加減にしい、あんたご飯なんかつくったらへんよ」子ども「飯なんかいるかい」階段をドドドと上って、ドアをバターン。

こんな子育てされている方おられますか。こういう子育てをしていただきたいんです。だってそうでしょ。お母さんは、「なんでくそばばあ言うねん」とかぶつぶつ言いながらご飯を作って、30分ぐらいしたら、「ご飯よー」って。そしたら、「はい」と言って子どもは降りてくるんです。さっきの言い合いはどこにいったんやと思いますが、これが絶対的安心感でね。どんなに親にぼろくそに言っても、親はご飯作ってくれるって思っているわけです。そんなにぼろくそに言えるのは親だけです。

その次に突っ掛かっていくのは学校の先生です。言ってみれば、学校の先生は親の次に信頼されているんです。そう思っただけませんか先生方。だってそうでしょ。学校へ来て怖い顔をしている子が、朝に隣のおっちゃんが「お早う」と言ったら、「あっ、お早うございます」

と言うわけじゃないですか。どんなに反抗期向えていても、隣のおっちゃんに食ってかかる子はいないんです。それは関係が遠いからです。関係の近いところに子どもは反抗していくんです。

＜この頃の子育て②＞

ここでもう一つお話ししたいのは、この時期の子どもたちはみんな二重人格とってくださいということです。どんな二重人格かといえば、おとな半分、こども半分ということです。お母さんたちがこの年齢のお子さんたちと接して、一番腹が立つことは、えらそうに「おかん、〇〇してくれよ」とか言うことです。「中学生のくせに、『おかん』てえらそうに」と、かちんときます。そうかと思ったら、自分の都合のいい時には、「なあなあ、お母さん。お母さん」と言って甘えてきます。

「中学生のくせに何甘えてんの」と言います。言われた子どもどうでしょう。自分は一人なんだけど、親に「中学生のくせに甘えるな」と言われたり「中学生のくせにえらそうにすんな」と言われたりするわけです。「僕は、どっちになったらいいの」と思います。つまり、こういうときは、おとな半分・子ども半分の二重人格だと考えて、子どもが「なあなあ、お母さん。お母さん」と甘えてきたら、「あっ、子どもでいてくれる最後の段階なんだ。ここを越えてしまうと、もうおとなになっちゃって、そんなに甘えてくれないんだ。だから最後の段階だから、甘やかしてあげよう」と思って、日ごろはしかめっ面で「何中学生のくせに甘え

てんの」と言うところを、10回に1回か2回でいいですからニコっと笑って、「なあに」と言ってあげてください。子どもは何と言うかというとき「きっしょー」と言います。

今度は「おかん」と何やかんやえらそうに言うてくる時、いつもやったら「何中学生のくせにえらそうにしてんの」と言うわけなんです。「あっそうか、今、一生懸命おとなになろうと背伸びしているんや。がんばれ、がんばれ」という気持ちで「どうしたん」と、ニコっと微笑んであげてください。すると彼らは「うざ」って言います。この年の子どもを相手しているお母さんは、子どもに「うざ」とか「きしよ」って言われがちなんです。でも、正面からぶつかり続けるのは大変なので、時々、子どもが予測できないような態度をとってあげてください。「うざ」「きしよ」と言いながらも子どもは、「何かちょっと抱えられた」感じになって、いい関係に戻りやすいんです。これを「holding (ホールディング)」と言います。いつも、ガンガンぶつかるばかりが能じゃないということですね。しっかりと、このへんを考えていただきたいと思えます。

11. 「赤子は肌を離すな・・・」

「赤子は肌を離すな。幼子は肌を離せ、手を離すな。少年は手を離せ、目を離すな。青年は目を離せ、心離すな」こういう繋がり、順番が非常に大事になってくるわけなんです。最後の「青年は目を離

せ、心離すな」の到達点にいくまでには、一つひとつの段階がうまく越えていないとやはりだめなんです。小さい赤ちゃんなのに抱っこせずに、下におろしっぱなしではいけない。幼児期に入っているのに、もう手をつないでいるだけでいいのに、まだ抱えこんでしまっている。あるいは、中学生の手は離してもいいが、まだまだ目を離してはいけません。これが、早くあるいは遅くずれてしまうと、子どもたちは、おとなたちとの関係がうまくいかなくなるのです。しっかりとこのあたりを保ちながら関係をつくっていくことが非常に大事です。

<こたえ>

「子どもが親にむかて暴力をふるってくる、どうしたらいいか」という相談についても、大事なのは、「holding (ホールディング)」抱えるということだと思います。抱えるというのも、何でもかんでも抱っこすればいいというものではありません。例えば、青年期に入った子どもが親に手をあげようとする時、一発目は震えています。ガンとすぐにくる子はいません。だいたい、どうしようかと思って手をあげているんです。その状態の時、相談にこられたら「できたら、その手をつかんであげてください」と、はっきりと言いたいです。でも、お父さんにその気持ちがなく、「いや、明日、会社でプレゼンがあるから、顔に傷がついたらいやですから、一晩、妻とどっかに逃げますわ」と言われたら、「それならそれし

か仕方がないですね」としか言いようがないのです。「無理にでも手をつかんであげてください」と言って、無理にしてもらっても、絶対にいい結果は出ないですから。

振り上げた手を子どもは受けとめてくれることを望んでいるんです。着地点を探しているんです。でも、その着地点が居なくなったら、子どもは上げた手をどこに降ろせばいいんでしょうか。本当は、親から迎えに行つて「やめとけ」とつかまえて欲しいのです。そうすると「子どもは殴らなくていい」という安心感が持てます。でも、逃げてしまったらどうなると思いますか。次の朝、お父さんとお母さんがそっと帰ってきました。彼は、朝からテレビを観てケラケラ笑っています。ちょっと落ち着いたかと思って、お父さんが「おい、お前昨日な」と言った瞬間、子どもに何も言わないままぼこぼこにやられます。着地点を与えなかったお父さんに、子どもは見捨てられたと思うんです。自分を受けとってくれない、親に見捨てられたと思うわけですから、子どもの側からすれば、親との関係が切れてしまうのです。「holding」これは、「抱えがたいものを抱える」「ぎりぎりのところまで抱える」ということです。「ありのまま受け入れる」とか、「見守る」なんていうそんな安易な言葉ではなく、ぎりぎりのところまで、しっかりと抱えることが「holding」の意味なんです。

12. おとなが子どもにできること

「抱えがたきを抱えるという努力を、はたしておとなが子どもにしているか」ということですが、もし、子どもが暗い顔をして帰ってきた時、言うてはいけない言葉があります。「やり返せ」「無視しろ」「先生に言え」「暗い顔すんな」「くよくよすんな」「負けるな」「がんばれ」「俺が先生に言うたろか」これは絶対にだめです。こういうことを言われると子どもは「あ、親もわかってくれないんや、誰に言うてもわかってくれないんや」と、自分の気持ちを言えずに学校に行って、いじめられても、にこにこ・へらへらしながら、逃げて、そして、笑いながら自殺するんです。最近の子どもたちは、そういうことが多いんです。まわりが気づかなかったのです。どこに言ってもわかってくれないから「いじめられてんのか」と聞いても「いいの、ふざけてるだけ」といじめられている子は言うんです。もしも、子どもがこういうふうに戻ってきたら、解決は考えなくていいのです。おとなは「あー、私もそういうことがあってん。つらいな、わかるわ。言うてくれて有り難う。お母さん・お父さん何もできへんかもしれへんけども、全部話してね」とそれだけでいいんです。「お母さん・お父さんが解決しに行ったら」と言うて、解決しに行ってもほとんど解決しないです。「いじめ」行為はなくなるかもしれませんが。どなりこんで行ったらどうなるかという「この親うるさいから、ほっとこ」と学校では完全にその子は無視をされて、孤立してしまうんです。し

っかりと子どものことを聴いてくれるお母さんやお父さんがいると、子どもは安心して「そんなに嫌やったら学校休んでもいいよ」と言われても、お母さん・お父さんの想いを胸ポケットに入れて、「いいの、学校に行って頑張るよ」といって学校に行きます。それを「やり返せ」むしろ、「先生に言え」となると、子どもはお母さん・お父さんを自分の胸ポケットに入れなくなる。そうすると子どもは、孤独で孤立してしまいます。

13. 「困った子」は、「困っている子」

これは、おとなが気をつけられないことです。「子どもは元気で明るいものだ」と思いこみが一番の問題です。子どもたちは、学校でも外でも、どこでも苦勞をしています。子どもたちが明るい顔をして、元気でいてくれたら、親である自分は何の心配もいらないので、無理に明るい顔をさせてしまっているんじゃないかと思います。おとなの忍耐力、受け入れる「holding」の力の弱さが、子どもたちをどんどん大変なところへ追い込んでいるのかもしれない。「みんなと同じように元気に戻そう」「みんなと同じように明るく元気に学校に行きなさい」とすることが、困っている子どもたちを追い込んでしまっているんです。「困ったなー」と言われる子どもというのは、本当は、本人が一番困っているんです。困っているけども、それをどこにも言うていけないし、話するところもなく、助けてもらえないから、困った行動をとるんで

す。ですから、困った子どもがいたら「何か困ってんのか」と聴いてあげてください。

14. おとなが子どもにすべきこと

おとなが子どもにすべきことというのは、親も教師もカウンセラーも結局は一つだと思います。

先生方は、中学校3年間だけ面倒みればいいというわけではないです。親御さんも家を出て行くまで、そこまでいい子にしていればいいわけじゃないです。その子が自分の目の前からいなくなった時に、それまでの子育てや教育の成果が出るわけです。学校の先生は、「中学校を卒業させて、次の学校や社会でどれだけうまくやれるか」親は、「子どもたちが巣だって社会に出て、どれだけちゃんと生きるか、生きていけるか」そのために、子育てや教育をしているわけなんです。カウンセラーもそうです。「子どもがいつまでもカウンセラーの前に居て安定している」のは、カウンセリングの失敗です。極端に言って、「こんなカウンセラーのところに来て失敗や。俺は自分でやるわ」と言わせた方がいいカウンセラーかもしれません。では何が必要かと言いますと、子どもの目の前にいるおとな一人ひとりが「あっ、おとなって信用できるんだなー」「おとなってわかってくれるんだなー」という思いを子どもに持たせてあげるといことです。おとなを信用してくれる子は、今いる学校を卒業して、進学・社会に出ても、行った先でしっかりとお

となと話ができるわけです。子育ての中で、しっかり親が向き合っていると、会社に行ってもそこにいる上司としっかりと向かい合うんです。でも、信頼できるおとなに出会わなかった人というのは、どこに行っても、次に会うおとなとちゃんと話ができない、向き合えないのです。だから、どんどん大変になってきて孤立してしまいます。子どもは勝手に孤立しているわけではないんです。おとながしっかりとかかわってやるのが、子どもが孤立から逃れるベースになっているんだということです。

おわりに

皆さん方には是非お願いしたいのは、子どもたちを家庭まかせにするのではなく、また、学校まかせにするのではなく、地域全体としてしっかりと子どもたちにかかわっていただきたいということです。個別にやってもらうのも非常に大事ですが、個人の努力には限りがあります。ですから地域でその体制を作っていくことが必要です。子どもや若者を育成支援する「協議会」のようなものを地域につくらなければいけないんです。そういう組織を作って、本当に、自分の子どもを人にあずけられる、人のお子さんも自分たちが面倒をみるというつながりの中で「おとなって信用できるんや、」「おとなって話ができるんや、わかってくれるんや」という関係を地域で築いていきたいと思っています。そのためには微力ではありますが、葛城市では私がちょっと努

力をさせていただこうかなと思っています。ほかの地域でも是非そういうことを働きかけていただいて、少しでも子どもたちがおとなとしっかりとかかわって成長できるような地域にしていだけたらと思います。

長時間、ご静聴有り難うございました。

*本講演録は、『実践』No.132（2010.3、奈良県人権教育研究会・奈良県人権教育推進協議会編）に掲載されたものを、執筆者、編集者の許可を得て採録したものです。